

# 7 Tips for Teaming Up

## —英語科における共同指導体制の構築—

向後 秀明

週末や長期休業中の貴重な時間を利用して学会や研究会に出かけ、新しい技を会得していき授業へ、でも、しばらくすると自分だけ“進度”が遅れ出し、いつの間にか元通りのスタイルで英文の意味確認が中心に…一人で授業改革をしようとする事の限界である。学校は組織である。“Super Teacher”がいるに越したことはないが、その一人一人だけという状態よりは、“少しだけ優れた教師が10人”いる英語科の方が組織としては質が高い。科全体がいかに同じベクトルを共有して授業改革を進めていくか、これは企業体などからすれば一笑に付されるほど小さなことかも知れないが、私たちには切実な問題である。おそらく、ここをクリアできれば、日本の、特に高校における英語教育は大きく前進していくはずである。いまだにクリアしきれていない私がここに記事を書くのは少々気が引けるが、今までの試行錯誤から得たことを述べさせていただきます。

### 1. 誰が team leader(s) になる？

集団を一つのチームとして機能させるためには、その舵取りをするリーダーが必要になる。その役割を担う教師が孤立無援になることが往々にしてあるため、できれば複数いた方がいい。リーダーは輪番で仕方なく回ってくる“英語科主任”的な存在ではなく、全体の授業力が向上していくことに職務上の価値観を見出すことができる人でなくてはならない。さらに、授業において生徒との関わりに重きを置く教室中心主義の人が好ましい。ただし、「誰かがやってくれるだろう」と待っていてばかりではだめで、誰もやらないのなら自分が先頭に立とうという気概を持ちたい。周囲から疎まれたり、風当たりが強くなったりしても動じることなく、堂々として、自ら動かずして他に不満を言う資格なし、である。

### 2. Mission Statement による指導方針の公表

生徒が卒業するまでに英語を用いて何ができるよ

うになっていることを目指すか、そのためにはどのような授業をしなくてはならないのかといったビジョンがないと、常に目の前の教材に振り回されるだけになる。「このレッスンをどう教えようか」ではなく、「目標達成のために、このレッスンをどう利用すべきか」という視点が必要である。そこで、以下に示す項目を含めた Mission Statement を英語科全体で作成し、これを責任あるものとするためにも、保護者を含めて外部に公表する。

#### Mission Statement of English Education

～〇〇高校における英語教育の指針～

〔理念〕-当該校における英語指導の方向性

〔指導目標〕-卒業時に身に付けている英語力

〔授業形態〕-教師の英語使用割合、各科目の授業基本フォーマット、クラス編成等

〔評価〕-領域ごとの評価方法と評価割合

〔学習効果〕-領域ごとの学年別 can-do リスト

### 3. 「共通ワークシート」をベースにした授業

「今年は先生があたり(はずれ!)」という気持ちを生徒に抱かせるのは、学校としては悲劇である。生徒が教師を選べない以上、基本的にはどの教室にいても同じ授業が受けられることを保証しなければならない。それを可能にする一つの手段が、同一科目であればどのクラスでも、どの担当者でも使用する「共通ワークシート」(次頁右下参照)である。これを利用すれば、授業の全体構成から設定するタスクやその展開方法に至るまで、教師間のプレが少なくなる。

### 4. 全授業の公開化—“これぞまさに失敗”から

「授業を拝見させていただきませんか？」

「いやー、今日はあいにく文法説明なんですよ」

一般に高校の教師は、授業公開を極端に嫌う。何も考えずに訳読をしているだけ、英語の教員だけども英語が得意ではない、この年で人に批判されたくな

い…理由は様々。しかし、いやしくも教師であるなら、その職務の心臓部である授業を公開できないというのは許されないであろう。いいところを見せようとするから、結局閉鎖的になってしまうのである。逆に、授業公開は自分の問題点を明確にし、その解決策を全員で共有していくことに意義がある。次のような変化球的な公開から始めてはどうか。

- ・固定カメラを設置し、複数の授業を撮影する。
- ・撮影した授業の中から、最もうまくいかなかったと思われるものを選ぶ。
- ・“これぞまさに失敗授業”を一人ずつ披露し、その原因及び改善策をディスカッションする。

### 5. 「クラス別平均点」にさようなら

授業を公開しながらない教師も、定期考査や小テストなどのクラス別平均点には目の色を変える。「よし、私の担当クラスの方が良かった」なんて思っているから、全体が変革していかないのである。どの生徒も自分の学校の生徒であるという認識を持つために、年間通してホームルーム単位で教師を固定する方式を考え直してはいかかが。学校によって種々の制約があろうが、各学年の外国語1科目は習熟度別展開とし、定期考査ごとにクラス編成を行うことぐらいは、それほど無茶な話ではないであろう。

### 6. 教科会議を授業研究の場に

週に1時間、教科会議の時間が割り当てられている学校が多い。しかし、その実態は“連絡会議”になっているところが多い。連絡は回覧などで済ませ、教科会議の時間を純粋に授業研究にあてるべきである。4で述べたビデオ視聴でもいいし、英語教育関連雑誌から特定の記事に焦点を当て、それを“批判的に”読み合ってもいい。教師は“専門職”でありながら、外国語を相手にする英語教師はとりわけ、その専門領域において多かれ少なかれ傷を負っていると思われる。その傷を、全員の力を結集して治療していく場が欲しい。

### 7. 共同指導体制は当該年度の半年前から

「この件については、来年度の検討課題ということで…」一種の学校用語である。次年度になると、それが検討課題であったことすら忘れてしまう。本気で英語科を組織として機能させたいのであれば、その約半年前の教科書選定の時期からスタートを

切っている必要がある。＜4月→3月＞というサイクルに慣れきってしまった私たちは、業務のほぼすべてを4月から始めようとする。処理すべき事案が多い4月に新たなプランの導入を検討しても、「忙しいからやめましょうよ」という結果になりがちである。学校社会の変革スピードが遅い一因である。先述の1～6すべてについて言えることだが、これらに初めて取り組む場合は、前年度の6月ぐらいから動き出さないと間に合わない。正直なところ、最初は精神的にも体力的にも辛い。でも、全員が必死になって、知恵を出し合いながら授業改革に向かって奮闘する—これが本来あるべき姿であろう。

### ※「共通ワークシート」

#### [1] Review (Listen & Oral Summary)

Points to catch	Notes (Key words only!)
-----------------	-------------------------

#### [2] What Do You Think? (Discussion in groups)

The writer says that ... Do you agree?

Answer	Reasons
Agree	• _____
Disagree	• _____

#### [3] Outlining through Listening

a. 1<sup>st</sup> Listen → Topic

1 <sup>st</sup> para.	Key words: _____ ⇒ [Topic] About _____
-----------------------	---

b. 2<sup>nd</sup> Listen → True-False Questions

(1) T/F (2) T/F (3) T/F (4) T/F

#### [4] Summary Chart

1 <sup>st</sup> para.	Where the writer went: _____ ⇒ What she did there: _____
-----------------------	---

#### [5] Expressions & Structures

### ※「共通ワークシート」による授業の流れ

①当該科目における到達目標の理解・確認		
〔原案作成担当者〕		〔科目担当者全員〕
②授業の1週間前までに原案提示	→	③原案に赤入れ(代案の提示)
④原案の修正	↔	⑤修正原案の確認
⑥「共通ワークシート」を用いた授業実践		
⑦授業及び「共通ワークシート」の検証		